

『engage1 君だけを愛す』

著：ふゆの仁子

ill：水名瀬雅良

愛している。

この言葉を、自分が本当に愛している人間から伝えられることが、どれだけ幸せなことか。伊関拓朗は実際に経験して初めて、本当の『至福』というものを味わっていた。そして今までつき合ってきた相手に伝えてきた言葉が、いかに上っ面だけのものだったかも、改めて思い知らされた。特に自分が同性にも反応すると自覚して以来、本当に人を愛することから逃げた。無意識に友人に反応する自分を嫌悪し、そんな自分を忘れるために半ば無理矢理女性と一夜を共にした。自分を正当化するために口にする吐きそうなほど甘い台詞が、さらに嫌悪感を増加させた。心の繋がりがなくとも身体は反応して、生理的欲求だけが充足され、相反するように気持ちだけが枯れた。それによりさらに心が冷め荒むことで、余計に無益なセックスを求めた。すべてが悪循環だった。いつかはこんな思いをしなくて済む日が訪れるかもしれない、いや、一生訪れない。葛藤する日々だけが過ぎた。それによりさらに答えの出ない考えを頭の中で行ったり来たりさせながら、夜の街を彷徨っていた。そんな日々が、愛する人に出会えた今は、既に懐かしくなり始めている。

◇engage | 君を愛す

「拓朗。さっきから何を苦虫を噛み潰したような顔をしている？」
頭の上から響く心地好い高さの、少し掠れた声に気づき、伊関拓朗は両手を頭の上で組み、思いきり身体を伸ばしてから、顔を後ろに向けた。
「ちょっと昔のことをね、思い出していたんだ」
唇の端で笑って、ソファの上に身体を横たわらせて寛いでいる永見潔の頬に軽くキスをする。
「それよりも潔は何を一生懸命読んでるの？」
雑誌を横から覗き込む。そして思わず「げっ」と小さな呻き声を上げる。
「さすがだな。セックスしたい男のNO. 1とは」
それはもうかなり前に発行された隔週発行の女性誌だった。
一年に一度、毎年同じ時期に、『セックスしたい男、したくない男』を発表するのだが、たかが一雑誌の女性読者のアンケートにすぎないその結果が、ありとあらゆる芸能人たちにとって、ある種のステータスやコンプレックスのもとになっていた。
伊関は今回、ランキング初登場にもかかわらず他を圧倒する票で一位に選ばれ、一躍時の人となった。その雑誌のインタビューの依頼もあったが、あまりの恥ずかしさに断ったという経過があった。
「どうして今頃こんな雑誌見てんだよ！」
伊関は顔を赤く染めて、その雑誌を奪い取ろうとするが、恋人はそれを許さなかった。
「何を怒る？ 男として一番名誉なことだろう？」
にやにや意地悪な笑みを浮かべる相手の表情に伊関は肩を竦めた。
「全然名誉なんかじゃないよ、こんなの」
伊関はその雑誌を、今まで捨てずに持っていたことを思いきり後悔する。
確かにどういうランキングであれ、一位に選ばれることは名誉かもしれない。でも本来俳優である伊関本人としては素直に喜ぶ気はない。
セクシーだろうがなんだろうがどうでもいい。金輪際自分は絶対女性はもちろん、他の男性とSEXすることはない。人気度を示すと言われても、伊関本人にとっては誉め言葉にはならなかった。
「拓朗」
うなだれる伊関のうなじの辺りにひんやりと冷たいものが触れ、ついでに生暖かい感触が当たり、背筋がぞわりとする。
「童貞の高校生の子供じゃあるまいし……そんなことで照れるな」
くすくすという笑い声とともに、生きもののように自在に動く舌が耳朶を覆った。しなやかな腕が首からするりと前に回り、胸元ではだけられているシャツの中に潜ると、滑らかだが逞しい胸に下りてくる。
「照れているわけじゃないんだ」
伊関は小声で呟きながら、永見の誘いに応じるべくゆっくり振り返ると、すぐ目の前に、一番好きな顔があった。

「潔」

愛しい男の名前を囁いた口をそのまま相手の口に重ねる。軽く唇と唇が触れ合うと、待っていたように永見の舌が伊関の口中に侵入してくる。

お互いの舌が絡み合い、刺激する。逃れればついてきて、追いかければ離れる。慣れた口腔内の愛撫は、次なる行為への合図でもあった。

「……んっ」

時折苦しげに声にならない声がどちらからともなく漏れるが、二人ともすぐには口づけを終えようとはしない。

伊関は永見との口づけが好きだった。

永見の表情を盗み見る。普段禁欲的で無表情なそこに感情が生まれ、やがて欲情に濡れ、乱れていく様子はそれだけで伊関を煽り立てる。

もちろん永見もされるがままでいるわけではない。伊関の上半身を露にし、その肌を丹念に愛撫する。それぞれが十分にえてくるのを待つうちに、唇の端から溢れて流れ出した唾液が、永見の細い首を通って鎖骨の窪みで止まる。

「拓朗」

永見は唇を離し、伊関の首をすっと撫でた。

伊関は体重をかけてソファに押し倒した永見の身体に覆い被さり、服の上から肌を愛撫し始める。

今日は休日ともあってさすがにラフな服装をしているが、タグを見れば『普段着』であるはずのこのシャツでさえ、高級ブランドの品であることがわかる。

さすがに最近でこそ気をつけるようになったが、かつては一着何万もするような服を平気で何枚も破っていた。知らなかったとはいえ、あまりに怖いもの知らずだった。

「安物だから気にするな」

今でこそ長者番付に名前が挙げられる立場になっているが、元来伊関は庶民なのだ。服の値段を知ったときには真っ青になったものだ。

だから逸る気持ちを抑え、ボタンをひとつひとつ丁寧に外していく。

けれども我慢ができない場合、服は脱がさずにそのまま挑む。

今は後者だった。

口づけですでに伊関自身は熱くなっているが、布越しに触れる永見も同様だった。

永見は自ら身体を捻って伊関の手を求めてくる。触れ合う唇が早くと訴えている。

「潔」

熱い息を吹きかけながらズボンのファスナーに手をかけると、永見も協力して腰を上げた。

「拓朗、早…くっ」

外に出た白く細い足が、伊関の腰にきつく絡みついてくる。

「焦るなって……」

早く欲しいのは伊関も同じだが、こんな風に求められると焦らしてしまいたくなる。焦らせば焦らすほど、自分の下にいる男は、淫らに、積極的に振る舞う。肌は赤く染まり、情欲に濡れた瞳が艶を増す。

伊関は欲望を抑えつけ、猛る自分で永見の下腹を刺激する。

「くう……！」

はっきりした目元が苦しげに歪み、綺麗に整えられた眉が寄る。肩に回っている手に力が込められ、爪が食い込んでくる。

「早く……してくれ」

緩やかに腰が押しつけられてくるが、伊関はまだ望むものを与えるつもりはなかった。

代わりに、天を仰ぐ熱い中心に手を伸ばし、腰の奥に指を伸ばす。収縮する熱い縁を指でなぞってからたまにひっかくようにすると、永見の腰が跳ねた。

「あ、は……んっっ」

「ここ、感じるんだ……？」

熱い囁きで尋ねると、永見は吐息で応じる。

何度も、それこそ数えきれないほど味わった身体ではあるが、抱くたびに新しい発見をし、伊関はより永見に夢中になった。飽きることなど決してない気がする。知れば知るほど、抱けば抱くほど溺れていく。こんな感覚を味わうのは生まれて初めてだった。何も知らない同士、身体から始まった関係で、ここまで深く愛し合えるとは思ってもいなかった。

肌を触れ合わせたまま身体をずり上げらせ耳元で息を吹きかけると、永見の全身が震えるのがわかる。同時に伊関の指を銜え込んでいる場所もさらにきつく収縮した。

「あ……拓朗っ」

永見は喉を反らせ、喘ぎ声を上げる。

立ち上がっている場所から堪えきれずに溢れ出したものが、伊関の指を濡らし始めた。指先でそこを舐りながら、永見を煽る。

「これだけで達けそうじゃない」
そんな伊関の言葉に、永見は正気に返って目を見開いた。
「ふざけるなっ！」
掠れた声で怒鳴って、伊関の顔を欲望に濡れたままの瞳で睨みつける。凄絶に美しく、凄絶に淫らだ。
「人を挿げって何が楽しい？」
自分の欲求に忠実な永見の姿に、伊関は微笑まずにはいられなかった。
「……どうして笑う？」
永見は自分の上で笑っている伊関に腹を立て、不機嫌な声を上げる。
「ヤル気がないならもういい」
一向に態度を改めようとしないうちに、まだ熱に火照ったままの身体を起き上がらせて、伊関から逃れようとした。怒りは本物だ。伊関は慌てて永見の肩に手を置く。
「待った」
だが、すぐそのまま戻される。
「ヤル気がないなんて言ってない」
伊関は永見の細い身体を易々と組み伏せ、もう一度白い胸元に口づけを落とす。
永見は抵抗するのを諦め、そっと自分の肌に舌をめぐらせる男の髪に指を埋めた。
「わがまますぎるぞ」
「どっちが？」
伊関はにやりと笑って、永見が望んでいたものを、ぐいと彼の腰に押しつけた。
「あっ……！」
永見の口から声が漏れる。十分に慣らされていない場所から、強い衝撃が全身を貫いていった。
「痛い？」
荒い息とともに吐き出された伊関の言葉に、永見は無意識に頭を横に振る。きつく閉じられた目には涙が溜まっていた。
伊関のほんの僅かな動きも、直接繋がった部分からすべて永見に伝わる。痛みなのか快感なのか、朦朧としてきた頭では理解できなくなっていた。
「拓朗……」
甘えるように永見は伊関の名前を呼びながら、腰に両方の足を巻きつけてくる。そうすることで、二人の身体がより深く繋がる。
細かい襞の締めつけで永見の体内の伊関も確実に硬度を増していく。
「潔」
伊関は優しい声で永見に応じ、ゆっくり腰を動かす。
「はぁ……拓朗……あ」
突き上げられるたびに、永見の口から甘い喘ぎが零れる。扇情的な声に永見の肩に手をかけると、彼の手はきつく伊関の首に巻きついてくる。お互いを見つめ合い、引き寄せられるように唇を重ねる。そして根元まで深く絡ませながら、頂上を目指して急激に登りつめていった。
汗ばんだ肌が冷えるのは早い。
身体を離すとすぐ、熱が冷気にさらわれていく。永見は小さく身震いして、くしゃみをした。
「寒い？ 大丈夫？」
床に脱ぎ散らかしたシャツを捨てていた伊関は、永見の様子を窺ってくる。そう言う伊関はかろうじて下着をつけているだけという格好で、よほど永見より寒そうだった。
「私は平気だ。それより、何か着なさい」
永見は苦笑いを浮かべる。
そうして笑う表情からは、たった今まで伊関の前で見せていた痴態はとうてい想像できない。
「俺は大丈夫、まだまだ若いからね。なんなら今ここでもう一度証明してもいいけど？」
激しい運動をした後にもかかわらず、伊関はまるで疲れている様子を見せない。これが若さなのだろうと思いながら、永見は真顔になる。
「ちょっとここに座りなさい」
永見はシャツを肩に羽織っただけの格好でソファに起き上がり、自分の横を示す。まだ身体中が弛緩しているせいか頭もはつきりしていないらしく、動きは緩慢でこめかみ辺りを指で押さえている。
「頭痛、ひどい？」
伊関は永見の手を取り、甲にキスをして横に腰を下ろした。
あまりにさりげなく当たり前のようになれるその仕様に、永見はなぜか赤面した。
「潔」
耳まで赤く染めて自分から目を逸らす永見を不思議に思って、伊関は声をかける。
「熱でもある……？」

伊関が額に伸ばす手から、永見は身を引いて逃れた。

「どうしたの？」

どうしたと聞かれても永見自身、答えようがない。

セックスまでしている仲なのに、今さら手にキスをされたことぐらいで照れているとは、口が裂けても言いたくない。

「昨日、館野さんがうちに来た」

高鳴る心臓を必死で抑え、永見は仕事の顔を懸命に繕う。

「誰、それ」

逃れようとする細くしなやかな手をしっかり両手で掴んだまま、伊関は応じる。

「杉山電機の広報部の部長だ。あれだけ毎日顔を合わせていたのに、もう忘れたのか」

「ああ。あそこの館野さんか。思い出した」

しばしの考慮のち、伊関の頭の中に一人の男の顔が浮かぶ。

杉山電機とは、関西に本社を置く、日本有数の家電メーカーである。

近年マルチメディアと総称されるジャンルにも手を伸ばし、昨年、業界のトップをきって『誰にでも使える、未知のマルチメディアを杉山電機が確立します』というキャッチフレーズで、比較的操作が容易な家庭用パソコンの通信システムを開発し、破格の値段で販売した。さらにその周辺機器一切を同様のキャッチフレーズで大々的に売り出した。

これまで保守的だった杉山電機にしてみれば、今後の社運を賭けるとも言える分野の製品だった。その情報・広告・宣伝のすべてを、広告業界トップを走る株式会社電報堂、それも情報宣伝営業部の企画課の課長である永見潔に名指しで依頼してきた。

金はいくらでも出す。企画にも一切口を出さない。その代わり、失敗は許されない。

これが杉山電機の永見に示した依頼条件だった。

そして伊関拓朗こそ、永見がこの広告のためにほぼ一年前に探し出した、ただ一人の人間であった。

永見の手がけたCMにより、杉山電機のマルチメディア戦略のイメージキャラクターとして、伊関は鮮烈なデビューを果たし、そのCMの勢いとともにも杉山電機の新製品は爆発的な勢いで売れた。

商品は発売より遥か前に予約段階で完売し、急遽すべての工場をフル稼働させて追加生産にかかったが、発売後一か月は店頭で商品が並ばないどころかさらに追加注文が殺到するという近年に稀なほどの凄まじい売れ行きを残した。

その後伊関は、このCMでの人気をきっかけに、本業であった俳優としても着実に出世街道を歩み、僅か一年でテレビのトレンドドラマでも欠かせない存在となった。

館野雄一はその杉山電機の社員であり、電報堂との一切の連絡担当者であった。

一流上場企業の広報部部長の館野は、その役職にありながら、どちらかと言うとおっとりした人物に見られがちだった。

四〇代前半の、白髪の混ざった豊かな髪で、常にグレーの背広に身を包んだ笑顔の優しい感じのいい人で、遠くで聞く声は低くて優しかった。なぜあれだけ世話になりほとんど毎日顔を合わせていながら、彼の存在を忘れていたのか、伊関自身不思議であった。

「本当に忘れていたのか？」

呆れたように永見に言われ、伊関は黙り込む。

「一度拓朗の頭の中を見てみたいものだ」

「いいじゃないか、思い出したんだからさ。それで、館野さんはなんの用事で潔の所に来たの？」

「仕事だ」

永見はあっさり答える。

「そんなのわかってる。館野さんが仕事以外で、わざわざ大阪から出てくるなんて思わないから」

「どうだか？」

意味深な笑いを一瞬浮かべて、永見は唇だけ動かして伊関に聞こえるか聞こえないかの声で呟く。だが、どこか上の空だった伊関はその言葉を聞き逃し、永見の次の言葉を待った。

「また、例の製品の件で依頼があった」

「へえ」

素っ気ない永見の言葉を伊関はそのまま受け取る。

「新しいハードでも作ったの？」

「そうだ。それをまた大々的に宣伝するらしい」

「今さら大々的にしなくたって、十分有名じゃない」

「世の中、そう甘くはない」

永見は伊関に捕らえられたままでもいた手を払って立ち上がると自分の部屋からA4サイズのファイルを持ってきた。

「今度ヤスダでも同じような製品が開発生産され、すぐ宣伝、販売にかかるらしい」

永見はパラパラとページを捲る。

米国資本であるヤスタ・コーポレーションは、これまでおおむね杉山電機よりも若年齢層を対象に、主として音楽関係の製品に力を入れてきた家電メーカーで、これまでコンピューター業界には参入していなかった。

しかし企業規模や資本は杉山に匹敵する。そんな企業がマルチメディア分野に本腰を入れるとなると、杉山電機が危機感を抱くのも、ある意味当然だ。

「これを見なさい」

永見は該当箇所を開き伊関に見せる。永見の肩の上に頭を乗せながらファイルを開いた伊関は、思わず目を見開いた。

そこには以前永見が作成したものを、明らかに意識して作られたとわかる広告があった。宣伝方法も広告デザイン自体も、永見が作成した物とはまるで異なる。だが、だからこそ根底にライバル意識が見え隠れしている。

おまけにまだコピーが入っていない広告の中心に立つ人物は、世間で伊関のライバルと言われている、モデル兼俳優の東堂潮だった。

裏から手を回し、公になる前の物を手に入れたが、ほぼ決定稿に近い。

「企画制作は秋沼アド。イメージキャラが東堂潮。さらに、イメージソングはM・モーションときている」

見事なまでに、杉山電機がCMに使っていたもののそれぞれのライバルである。

広告代理店である秋沼アドは、電報堂に大きく溝をあけられてはいるが、業界二位を常にキープし、着実に業績を上げている。

M・モーションというバンドも、ドラマの主題歌を担当して以来あっという間にメジャーとなったロックグループで、杉山電機のCM曲を担当していたルナテイクとはデビュー当時から何かと比較されていた。

そして東堂潮の起用だ。数か月前にデビューした彼は年齢こそ伊関より下だが、デビュー直後から明らかに伊関を意識した売り出し方をしている。

「ここまで敵対心をあからさまに見せつけられたのは久しぶりだ」

嬉しそうに目を細める永見は、広告業界にこの人ありと言わしめる人物である。

入社当時から、センスと頭の回転の良さ、強引とも言えるやり口で順調に仕事をこなし、何本もの大ヒットCMを手がけ、入社三年目にして、『永見に任せれば間違いなし』と言われるようになっていた。

弱冠三二歳でありながら、広告業界トップの株式会社電報堂の中で、エリート集団である情報宣伝営業部企画課課長というポストに就いているのも、当たり前と言える。

課長職に就いてからは、伊関を使った杉山関連の件以外は前線から退いてはいるものの、いまだその影響力は絶大だ。それゆえ面と向かって永見に喧嘩を売ってくる者は、ここ数年というものまるでなかった。

「秋沼アドに、久々に骨のある人間が現れたようだ」

永見はまるで、飢えた獣が久々の獲物を見つけたような表情を見せる。

それは伊関が初めて目にする顔だった。

ただでさえ赤い唇に明白な朱が混ざり、眼鏡の奥の瞳がギラギラと強い光を放つ。全身から漲るオーラは見ているだけで興奮する。伊関の知らない貪欲さを含んだ魅力的な永見の姿に、伊関の身体の奥にえもいわれぬ衝動が芽生える。

「潔……！」

突然の欲望を抑えきれぬわけもなく、伊関は永見の身体に再び押し寄せた。

ソファのスプリングが沈み、ファイルが床に落ちる。

「拓、朗……」

抗う間を与えず、すぐさま伊関は左右に永見の足を大きく開き、小さな窄まりに猛った自分の欲望を押しつける。つい先ほどまで伊関を受け入れていた場所は、比較的すんなりそれを許容した。

「あ……ん、ん……」

不安定な体勢で伊関に抱かれながら、それでも永見の表情は変わらなかった。

艶やかなまでの笑みを浮かべたまま、己の内に生まれる快感を貪る。

「拓朗……また、忙しくなるぞ」

腰を大きく揺らし、絶え絶えの息の中で永見は呟く。

「あんたさえいてくれるなら、俺はなんだってやる」

腰を激しく動かしながら頷く。

自分が今あるのは、永見潔という男がいたから。見出ししてくれたから。その存在に感謝するとともに、絶対的な運命を感じている。

何もかもが空虚で生きる気力もなかった伊関に、永見は生きる術と目的、さらに意味を与えてくれた。その永見が望むなら、自分にできないことはない。

世の中に人間は星の数ほど存在する。生まれて死ぬまでに、会うことのない人が多い中でも巡り合いというものは、当たり前なことではあるが、宝くじに当たるよりも数段確率が低いといえる。

伊関拓朗と永見潔の出会い、ある種、神の作為、もしくは運命的なものがあったのかもしれない。二人はまるで異なる環境に育ちながら、『何か』の物足りなさを感じ、心が渴いていた。

それぞれ、本当の両親との間になんらかのズレが生じ、ともに自分の居場所を求め続けていたのである。

そんな二人の千載一遇の一瞬は、目前に迫っていた。

永見潔、三二歳、伊関拓朗、二二歳の四月。

伊関は永見の身体の中に思いを吐き出し、一向におさまろうとしない熱をじっと感じながら、目を閉じた。

◇engage | 邂逅

「このCMの制作に関するすべての権限は、情報宣伝営業部企画課課長である永見氏に一任したいと思います。万が一の賠償責任については五分五分ということで、いかがでしょうか？」

家電メーカーの最大手である杉山電機の広報部部長である館野雄一は、株式会社電報堂のエリート集団と呼ばれる『情報宣伝営業部』の中の企画課の課長職に就いている、机を挟んでちょうど自分の真向かいに座る、フレームレスの眼鏡をかけた三〇代前半の男に目を向ける。

細面の端正な、どこか人形めいた冷やかな面差しながら、眼鏡の奥の瞳だけはギラギラさせている。彼は真剣なまなざしで自分を見つめている。

四〇代になり部長に就任するまでの間に、様々な駆け引きや取り引きを行い、それらにすべて勝ち続けてきた。穏やかで優しいな雰囲気とは裏腹に、強気な戦略と状況判断の良さ、押すべきところと引くべきところを熟知したやり方に関しては、これまでの業績からかなりの自信を持っていた。最近ではどんな賭けに出ても、まるで負ける気がしなかった。

だが、今回の件に関してはかなり勝手が違っている。

技術の進歩はまさに日進月歩である。

杉山電機が新製品を開発し販売することは、当然他の同業社も知っている。一年もしないうちに同じような商品が他のメーカーから販売されることは必至で、一気に熾烈な競争が始まるだろう。だからこそ他社の競争がないこの時期に、存分に広告を打ち、杉山電機の名を消費者に印象つけたかった。

そこで名前が挙がったのが、今日の前に座る男、永見潔であった。

永見が広告業界にセンセーショナルにデビューしたのは、すでに八年前のことになる。

入社一年目に制作した自動車のCMは、その年の『視聴者の選ぶCM大賞』でダントツの一位に選ばれた。特に突飛なものではない。一台の車を一人の人間が壊すフィルムを逆再生して、造り上げる映像にした。

音楽にジャズを選び、全体のトーンを青に統一したことが、視聴者の心に残ったのである。そして『貴方のために、心をこめて』というコピーとCMの内容があいまって、本来大量生産されている自動車が、まるで手作りの車であるような印象を与えた。

このCMのヒットにより、その自動車の販売台数は前年に比べて大幅にアップし、同時にCM制作者の名が一躍有名になった。

永見は自分が表に出るのを嫌い、一度しかインタビューに応じていないのだが、その稀少性とルックスの良さから、永見潔というCMディレクターの名前が有名になった。

その後も永見は数々のヒットCMを作り出した。そして、永見が手がければその商品のヒットは間違いなしと言われるようになるまでには、たいした時間はかからなかった。

社内における永見の立場は、初めのうち、かなり微妙だった。

先輩を敬うという概念が、頭になかったのだ。

広告業界は実力がものを言う世界ではあるが、まだその実力を発揮することができない段階では、傲岸不遜と取られる言動から上司・同僚を問わずかなり煙たがられていた。

というのも、永見潔という男の家庭環境に由来する。

永見の父親は財閥系都市銀行の頭取で母親は旧家の出身、かつ皇太子妃候補にも挙げたことのある美人だった。さらに父方の祖父は既に隠居生活に入っているものの、政財界に強い影響を及ぼす力を持つ。

彼は三人兄弟の末っ子で、一〇歳と七歳違いの兄がいる。

兄たちと年が離れていたことと母親譲りの端正な顔、さらには父親譲りの優秀さから、両親はもちろん両家の祖父母に溺愛された。おそらくこれが、永見という男の人格形成に大きく作用したのだろう。

子どもの頃から周囲に大人が多かったせいか、冷めた物の見方をするようになっていた。

幼稚舎から高校まで、お坊ちゃん学校で過ごし、在学中にはスポーツを始め様々なことに挑戦したが、どれもそれほどの努力をせずにそれなりの成果を得られてしまった。友人もいずれも劣らぬ家柄の坊

ちゃん、皆どこか浮世離れた性格をしていた。永見は誰とでもそつなくつき合っていたが、誰に対しても一歩引いて接するところがあった。

親への些細な反抗心から、高校に入学してから喫茶店でアルバイトを始めた。正直、どこで働くのでもよかったのだが、家とも学校とも離れた住宅街にある昔ながらの面影を見せるそこは、不思議なほど落ち着ける雰囲気醸し出していた。

やがて学校だけでなく家の中でも同じようになっていく。家族に対しても距離を置きつつ、人の気持ちをまるで無視して話を進めようとする親の態度にはいささか腹を立てるようになった。

帰りが遅くなることについては図書館に行っていると言うだけで済んだ。両親も兄もあまり家にいる方ではなく、過保護なわりには息子の実生活にまで干渉してこなかったのだ。それは永見にはありがたかった。

このときに働いた喫茶店のマスターとは、珍しいことに気が合った。

三〇代後半になるまでずっと独身でいる一風変わったこの男は、名前を伊藤秀明と言い、東京芸大で美術を学び、卒業後一〇年をフランスの片田舎で過ごしたという経歴の持ち主だった。

初めのうちは「変な奴」という印象しかなかったが、次第に彼の人となりに興味を持つようになった。どこか人とは違うものの考え方、常に優しい物腰。どれを取っても今まで永見の周りにはいないタイプだった。いつしか永見は伊藤に心を許し、ストレートに上の大学へ行かず、国立の大学を受験するつもりだという話もした。

『自分の道は自分で選ぶのが一番だとは思うよ。ただ、ご両親の気持ちも考えてあげないとね』

そう言う伊藤は、どこか寂しげだった。

他校を受験するという話は、知ろうと思えば両親にはすぐにでもわかるはずだった。何しろ、担任が永見の成績を惜しんで、何度も家に確認のための電話を入れていたのだ。そのたびに不在で、連絡をくれという伝言を無視したのは彼らのほうだ。

もし三年の春ぐらいの段階で両親からストップがかかっていたら、諦めていたかもしれない。

というよりはむしろ、受験する機会を失っていただろう。彼らにかかれれば、学校に手を回し必要書類を出せなくすることなどお手のものだからだ。学校にとって両親からの毎年の寄付金は欠かせないもので、下手をすれば理事長より力があつた。だが、実際に話が漏れたのは、受験したあと、それも東京工業大学の合格発表当日だったのだ。

当然、両親は激怒した。まったく父親の言葉を聞き入れない息子に切れ、勘当を言い渡した。母親は泣き、父に謝るように迫ってきた。

『一体、何が不満なの？』

母親に問われて初めて永見は考えた。

だが考えてみても、なんの不満もなかった。強いて言えば、不満のないことが不満だった。永見はこれまでの人生において、何かひとつのことに夢中になった経験がなかったのだ。何もかもそつなくこなす、欲しいと思う物はすべて手に入った。周囲にいるのは全員イエスマンで、永見の強い興味を引く人間はそれぞれ、伊藤ぐらいだったのである。

その瞬間、永見は無性に伊藤に会いたくなつた。受験前にバイトを辞めて以来、一度も会っていなかったその男に、どうして会いたくなつたのか、そのときにはわかっていなかった。けれどバイト先で伊藤に会った瞬間、明確に心に芽生える感情があつた。

胸の奥に渦巻く不可思議な感覚を、このとき初めて永見は理解した。

自分はこの男を好きなのだ、と。

伊藤は唯一永見を、一人の人間として見ていた人物だった。次第にそんな伊藤に永見は心を許し、自然に振る舞えるようになった。

だがその気持ちを自覚したと同時に、伊藤の結婚を知つたのである。

伊藤とどうやって別れたか覚えていない。

その後大学に入ったものの、物足りなさを感じてしまった。

結果、学校にはほとんど通わず、バイトに精を出した。人の紹介から成り行きで始めたディスコの黒服は、無愛想で高飛車な態度が同僚には反感を買ったが、客には受けた。その結果留年が決まったことにより休学し、単身渡米した。

ビザの必要がない期間をアメリカで過ごしたあと日本に帰国し、またあてもなく渡米する。言葉の苦労はまったくなかったものの、それまでも家族で出かけたことはあつたため、誰かと交友関係をもつこともなくたった一人で過ごした。アメリカでの足かけ一年の生活で、永見はこれまでの一八年より、たくさんのかつことを学んだ気がした。

帰国後は大学院に進むことを教授に切望されながら四年のうちに就職が内定し卒業してしまつた。おまけに入社したのが、強力な縁故を持っていても入ることが難しいと言われる、広告代理店で業績トップの『株式会社電報堂』であつた。

周りが遠巻きに眺めているのをよそに、永見は確実に自分の実力を発揮していった。『創造すること』

の楽しみも理解した。

どこか人形のような冷たさのある端正な顔に笑顔を浮かべながら、かなり痛烈な意見をずけずけ言う。実力ではあるが他人の仕事を横から奪うことに罪悪感はなく、社外だけでなく社内にも永見に仕事を取られた人間は何人もいた。

面と向かって恨みを言う者も初めのうちはいた。だが、どんな罵詈雑言を浴びせようと顔色ひとつ変えない。相手が言いたいことを言ったあとで、帰ろうとする背中に、永見はもう二度と立ち上がれなくなるほど致命的な一言を返す。それゆえ、誰も何も言わなくなった。

「そんなに周りを排除していたら、いつか恨み殺されるぞ」

同期のカメラマンである溝口義道はよく冗談交じりにそう言って笑った。

アメリカで有名なカメラマンに弟子入りするため、単身で来ていた溝口が永見と出会ったのは、当時まだ最悪の治安だったハーレムだった。それは永見にとって、最悪極まりない思い出に他ならない。

興味本位で訪れたハーレムで、永見は溝口の仲間であるアメリカ人に輪姦された。

その現場に溝口はいなかったし、彼は仲間がレイプしようとする『ニホンジン』である永見という男のことも知らなかった。

郷に入れば郷に従え、という言葉のとおり、ルール違反を犯したのは、その『ニホンジン』なのだ。

それでも溝口は普段ならこんな気紛れは起こさないのだが、何気なく、仲間の餌食になって立つことすらできないほど男の精を受け入れさせられ、道端にボロボロのように捨てられていた永見を見に行っただけで済んだ。

血や精液で汚れながらも端正な造りとわかる顔が、ひどく艶っぽく思えた。唇の切れた口からは甘い匂いがした。レイプされる際、何かしらの薬を飲ませたのだろう。さらに袖を捲ってみれば、案の定、腕は無数の注射針の跡で青くなっていた。

薬のせいで朦朧とした意識の中にありながら、永見は自分の身体を検分している溝口の顔に、そのきつい眼差しを向けてきた。この男は何も失っていない。それどころか見知らぬ溝口に対し、剥き出しの敵意を向けている。溝口はその目が妙に気に入った。

だから行きつけのモグリ医者のもとに連れていき、薬物中毒が緩和するまで面倒をみた。最中にかがされた催淫剤の後遺症は、永見をしばらくの間悩ませ続けた。この症状がおさまるまでの面倒をみたのも、当然溝口であった。

とりあえずの回復を見せた永見が最初にしたのは、自分を輪姦した人間の素性をすべて突き止め、余罪を告発したうえで警察に捕らえさせることだった。

溝口の仲間であることは承知していたが、それとこれとは別だと言いきっての行動だ。これを機に溝口との縁が切れるかもしれないことを恐れながら、どうしても自分を汚した人間を許すことができなかった。

ところが、溝口という男は永見の想像を遥かに超えた性格を持つ人物だった。絶縁を覚悟して永見がその事実を告げたとき、ただ一言「仕方ねえな」と笑っただけで、永見の行為を責めたりすることはしなかったのである。

そんな態度を目にして、溝口にはかなわないと、永見は初めて思った。

掴みどころのない、大陸気質の溝口は、どことなく伊藤と似ているような気がした。だが伊藤よりもずっと変人でずっと懐の大きな人間で、ずっと不可解な人間だった。

復讐を終えたあとも、永見は溝口のアパートに居座り続けた。そのうちに、お互いがお互いのないところを吸収し刺激し合い、永見は同等の人間として溝口を受け入れることができた。

溝口は溝口で、永見の永見たる部分を認識し、その尋常ならざる頭脳と考え方を愛した。

上辺だけではない、かといってすべてを知っているわけでもない。けれど、これまで友人らしい友人のいなかった永見にとって溝口は初めての友人となり、溝口にとっても永見は、かけがえのない存在となった。

だからといって決して慣れ合う関係にはならず、永見の帰国の際、溝口は引き止めず、永見もまた自分の所在を教えはしなかった。

これで終わる関係だと思っていたわけではないが、もしそうなら致し方ないと永見は思っていた。しかし、数年後に帰国した溝口は、永見が電報堂に入社する事実を聞きつけると、直接電報堂に自らの腕を売り込んできた。当然、永見には内緒だ。

入社式で知った顔を会場で見かけたときの永見の表情を、溝口は『今までに見た中で最高の顔だった』と言っている。それほどまでに、彼らしくなく戸惑った顔だったという。

しかし、再会した永見は、アメリカで会ったとき以上に他人を寄せつけない性格になっていた。だから冗談まじりに永見に忠告したつもりでいた。いつか殺されるぞ、と。

が、冗談では済まなかった。

永見は、とある男に殺されかけたのである。

たまたま溝口がその場にいたから良かったようなものの、下手をすれば永見はすでにこの世にいなかったのかもしれない。

理由のひとつに、永見のその性格があった。

永見の祖父の力で事件自体は永久に闇に葬られることになったが、この事件を通し、永見は完全な人間不信に陥った。

これまで以上に仕事に手段を選ばなくなり、他人を拒絶するようになった。溝口はそんな永見をずっと危なっかしいと思っていた。ただ一人永見に認められ、彼の心の中にいることを許可された身の上ではあったが、だからこそどうにもならないこともあった。

永見がどれだけ目に余ることをしでかしても、溝口には口を挟めない。

永見を戒めることは容易だ。同時に永見が自分を弾き出すこともたやすい。だが、今この状態で永見が自分までも遠ざけてしまったらあの男がどうなってしまおうか、考えることすら恐ろしい。

永見が何もかも捨てて自分に頼ってくることは絶対ない。妥協を許さない性格とエベレストよりも遥かに高いであろうプライドが絶対にそれを許さない。溝口という男は、永見がすべてを委ねるには、弱みばかりを知りすぎている。

溝口は何よりも永見の天才的な才能を愛していた。永見といれば、一人では絶対に味わえないであろうデカイことができる。その才能を潰したくなかった。でも自分では永見が今嵌っている沼から救えないことも理解していた。

これまでに何度か危険な状況はあった。だが今、一番危ない状況にあると思う。細い糸のように、繊細な心のバランスが、今にも崩れてしまいそうなものが見えていく。

社内でも一目置かれる存在になった。それこそ社長でさえ、永見を腫れもののように扱う。彼の神経を逆撫でしないように、一挙一動を見張っている。仕事も今では課長という立場上、先頭きって動くことも許されない。

欲求不満はつもの一方だった。

そろそろキレル、と思っていた矢先、天の采配のように杉山電機の仕事が飛び込んできた。

まさに、絶妙のタイミングだった。

「わかりました」

永見は声のトーンを変えずに、いつもの口調で館野に答えた。

「当社で責任を持って取りかからせていただきます。ただひとつ確認したいことがあるのですが、よろしいでしょうか」

「どうぞ」

館野は明らかにほっとした様子で応じる。

永見の名を挙げたのは館野だが、絶対に依頼を受けてもらえるという自信はなかった。

当然のことながら、ここで断られたら面目はまる潰れになる。責任を取って辞職するどころでは済まない話だ。

「『マルチメディア』という言葉の概念ですが、新しい、今までにない、限りない未来への可能性を秘めたもの。この考え方で誤りはないでしょうか？」

冷静な永見の言葉に、館野は大きく頷いた。

「少なくとも私はそう思っています。また、厳格な意味とは異なっても構わないというのが当社の意向です」

「かしこまりました。それでは、実際のスケジュールの話に入りましょう」

永見はやっと自分の持っていたアタッシュケースの蓋を開けて、中から様々なスケジュールでぎっしり埋まった手帳を取り出した。

館野との交渉をしたその日のうちに、永見は会議を開き杉山電機のCMに関する打ち合わせをした。

様々な提案をしたが一切異論は出なかった。

結果、一人のイメージキャラクターを設定してすべてのCMに起用し、商品はほとんど表に出さず、その人間を『マルチメディア』そのものとして売り出すことが決まった。

既成のタレントでは意味がない。限りない未来への可能性を秘めた、誰も知らないが万人に興味を持たせる人間でなければならない。そんな人間がいるのか。非常に難しいが、絶対に探し出さねばならなかった。

早速CMのイメージキャラクターのためのオーディションを独自に計画した永見は、ありとあらゆる他のオーディションにも顔を出した。めばしいTV番組も録画してその日のうちに視聴し、同時に発売される雑誌もジャンルを問わず殆どに目を通した。

一方で、具体的なCMのコンテを作り、コピーの選定、ポスター撮りの予定も決めなければならない。永見はできるところはどんどん話を進めた。

信用するスタイリスト、メイクアップアーティストのスケジュールをある程度押さえ、キャラクターが決まり次第すぐにでも取りかかれるように準備した。

CMソングについては比較的あっさり決まった。

こちらに関しては電報堂の子会社である電報堂エージェンシーにいる、永見の信頼する吉田昭久という部下にある程度を任せることができたためだ。

吉田には、現在生きている人間が作詞作曲した音楽の中で、ジャンルを問わず二〇曲程度を選ばせ、それを企画会議にかけ一〇曲に絞り、中から永見が一曲を選び、その曲を作った人に依頼することにしてた。

凄まじいプレッシャーとなったが、その卓越した着眼点とセンスにより永見の期待を裏切ることなく、吉田は実に絶妙な曲を選んできた。

そうして最終的に永見が選んだのは、生楽器とシンセサイザーをうまく溶け合わせたクラシックを基礎としながら、あらゆる音楽をミックスさせたルナテイクという五人組のグループだ。

依頼する前段階で、永見自ら彼らに会った。まだ世間の荒波をよく知らない若者ではあったが、無鉄砲さが気に入った。永見は自分の実力を理解し、それを隠すことのない人間が好きだった。さらに彼らには、自負するだけの明確な実力がある。

事実彼らはそれぞれ音大出身であり、各分野で上位の成績を残していた。

だが、肝心要のキャラクターが決まらない以上、どれだけ他が上手くいっていてもどうにもならない。つまり、選考は難航を極めたのである。

妥協という言葉を知らない永見は、この仕事に入ってから布団の中で熟睡したことがなかった。土日関係なく毎日会社に詰め、僅かでも空いている時間があると、できるかぎり様々な人の集まる場所に足を運んだ。

永見のイメージする人間が絶対どこかにいるはずだ。だが数えきれないほどのオーディションを開催しても、永見の思う人間は現れない。

だが、確実にタイムリミットは迫っている。

永見は、生まれて初めて弱音を吐きたい気分になっていた。今までその存在を信じていなかった神にすら、初めて祈りたくなった。

溝口はまるで死人のような顔色をした永見を見て、さすがにマズイと思った。何しろ本人は真っ直ぐ歩いているつもりかもしれないが、足元がふらついているのだ。

外出先から戻ってきたばかりにもかかわらず自分の椅子に座る間もなく、またどこかに行こうとする永見の手を捕らえる。そして比較的使用する人の少ない、会議室フロアにあるトイレの個室に永見を連れ込んだ。

「なんのつもりだ」

力のままに壁に身体を押しつけられた永見は、ただでさえきつい眼鏡の奥の目をさらに吊り上がらせ、自分よりふた回りは大きいであろう男を睨みつけてくる。

「すぐ会議だ。貴様と遊んでいる時間はない」

そこをどいてくれ。

怒鳴ろうとした永見の口が、続く言葉を発するよりも前に髭を蓄えた口に覆われる。そして、ずり落ちそうになった眼鏡が奪われる。

閉じる間もなく開いたままの唇の間をぬって舌が割り込んできて、歯ぐきの裏に触れ上顎を刺激する。腰に手を回され、顎を痛いぐらいに掴まれる。抗おうとして振り上げた手はやすやすと溝口の腕に捕らわれる。

「ん……っ」

息苦しさで永見が顔を背けようとしても、溝口は許さなかった。

絡み合わされた舌が痺れてくる。次第に頭の中が白濁してくる。他のことなど考えられずに、溝口の舌のある場所だけに神経が集中してくる。

永見の腰から下の力が抜けて膝ががくりと曲がりそうになるのを、溝口は片手で楽々と支える。

だらりと下がった永見の手が肩に伸びる頃になって、ようやく溝口は唇を解放した。

そして欲望に濡れ始めながらも生気の漲る永見の顔を見て、溝口は意地悪い笑みを浮かべる。

「今日は、このまま俺につき合え」

「だから会議があると……」

「なんなら、会議に出られなくなるぐらい、この場で犯ってやろうか？」

苦笑しつつも、溝口の目は笑っていなかった。

永見は表情を崩すことなく、はあと諦めの息を吐き出した。

「冗談でも、そんなことを言うな」

永見は肩を竦めた。

溝口という男は、やると言ったことは絶対にやる。アメリカにいた頃に何度か肌を重ねたことがある。互いに恋愛感情はまるでなく、成り行きというよりは必要に迫られての行為だった。

永見はともかく、溝口は本来男も女も気持ち良ければOKという男だったが、日本で再会してからは、一度もセックスしていない。

溝口の愛撫はきつくはない上に上手い。だから余計にタチが悪い。以前、夜をともにしたあと数日は、まるで身体が使いものにならなくなった。それを考えれば、会議をひとつ欠席するほうがまだマシだ。

「それでどこにつき合えばいいんだ？」

永見は溝口の胸ポケットから眼鏡を取り戻し、かけ直す。

「新宿五番街」

「.....？どこだ、それは」

「行けばわかる」

溝口は訝しげな表情を浮かべた永見の頬に小さなキスを落とす。

連れて行かれた場所は、銀座の中央通りを外堀通り側に少し入ったところに位置する、小劇場だ。

「演劇を観る趣味なんてあったのか」

永見は少し驚いた。

「実はな」

溝口は髭に手をやって照れ笑いをしながら、当日券を二枚買った。階段を下りて地下に入る。入り口でコピーで作られた小冊子を渡され、扉を開けて驚いた。天井が近く狭い観客席は人で溢れ、酸素が足りないような感じがした。

溝口は慣れた様子で中に入り、最後部に位置する場所に立つ。

「人気があるんだな」

永見は微かな明りを頼りに溝口の隣に立つと、冊子を捲りながら呟いた。

「俺がこの間観に来たときはそれなりに混んではいたけど、ここまで人は入ってなかった」

「なんだ、二回目なのか」

一生懸命に演じる姿というのが好きで、溝口はよくこうした二流ともいえないような劇団の公演に足を運んでいる。『新宿五番街』の舞台を観るのは今回の公演が初めてなのだが、一度目に観に来たときはまだ二日目だったせいか、役者も裏方も慣れていないといった印象を受けた。ただオリジナルの演目自体は面白く、時間があればもう一度慣れた頃に観にこようと思っていた、結局今日になってしまったのだ。

楽日が明日のため、これだけ混んでいるのだろうと思いながら、溝口も冊子を開いた。

「あれ？」

「どうした」

驚きの声を上げる溝口に永見が顔を上げる。

「配役が変わっている」

「前回観たときとか？」

「ああ。それも主役だ。伊関なんて役者、この間はチョイ役でも出ていなかったのに」

「イセキって、伊関拓朗か？」

「知っているのか？」

溝口は意外そうな声を出す。

「知っているというわけじゃないが.....」

永見は呟きながら自分も配役のページを確認する。確かに主役のところに『伊関拓朗』の名前と、コピーのせいではっきりしないが顔写真が載っていた。

永見が目を通していた雑誌の中には演劇関係のものも混ざっていた。その中の小さなコラムで、『伊関拓朗』の名前を目にしていた。

『名前もないような端役を演じながら、注目に値する。今後を見守りたい』

写真もなかったが妙にこの言葉が心に残り、伊関のプロフィールも見ている。高田馬場にある某有名私立大学を中退したという記事を記憶していた。

「すみません、ちょっとお聞きしたいのですが」

永見は冊子から目を離すと、突然思い立ったように、隣にいた業界関係らしい女性に声をかける。

不意に見知らぬ男に声をかけられた四〇代後半ぐらいの女性は、訝しげな目つきを向けつつも、永見の顔を見た瞬間表情を変える。

「この劇団の公演を初めて観るのですが、主役の伊関拓朗という人はどういった役者ですか？」

「拓朗？」

女性はその名前を聞いた瞬間、とても嬉しそうな顔をした。

「私はずっと前から彼がいいと思ってたの。だけどこれまではたいした役を貰えていなかったのよね。

実は今回も役がなかったんだけど、数日前に主役が倒れて急遽代役に抜擢されたの」

「そうだったんですか」

「本当は一回きりだったらしいんだけど、その演技があまりに素晴らしかったんで、楽日までずっと拓朗が主役をつとめることになったわけ」

女性は初対面である永見に対し、『拓朗』がどれだけ素晴らしいかを、まるで少女のような口調で延々と説明し始めた。

ようやく口を閉ざしたのは、開幕のベルが鳴ってからだった。

「ただのミーハーファンか？」

小声で言った溝口は、永見を肘で小突いてくる。それに対し永見は、薄笑いを浮かべて首を横に振った。

「劇団Aの演出家だ」

「ってことは、あのヒットメーカーの？ 須永正代？」

永見の言葉に、溝口は目を丸くした。

「声が大きい」

永見は口の前に人差し指を立ててから、微笑んで頷いた。つまり、肯定だ。溝口は目を睨り声を潜める。

「.....どこで気づいた？」

『劇団A』は、現代日本の超人気劇団のひとつである。その『A』の演出家である須永正代は、手がけた作品のすべてをヒットさせ、自分が作り上げた観客動員の記録を自ら塗り替えるということで有名だった。しかし演出家は裏方であるべきという強い信念を持っているため、極度に自分が表に出ることを嫌い、写真は勿論、ラジオやテレビのトーク番組にも出ない。

溝口ですら知らないその演出家当人だと、どうしてわかったのか。

「話し方で」

「どこかで聞いたことあるのか？」

「雑誌のインタビューを読めばわかるだろう？」

あっさり言い放たれ、溝口は啞然とする。

一体どこの誰が、初めて訪れた劇場で偶然隣に立った人間の話し方と、目にしただけのインタビュー記事で話し方が同じだとわかるのか。

本当に恐ろしい奴だと、溝口は心の中で呟く。

やがて、観客席側の照明が落とされる。僅かなざわめきののち、舞台がスポットライトで照らされる。そして一人の男が、闇の中に幻のように浮かび上がる。

永見は眼鏡のブリッジを押し上げながら目を細める。

『俺は』

心地好い、伸びはあるものの癖のあるテノールの声が、劇場内に響き渡る。

『俺は、なぜ生きているのか？』

主役である伊関拓朗は、観客席にゆっくり強い瞳を向けてくる。

背が高い。全体的にバランスのいい体格で、手足が長い。

面長の顔を覆うように、肩口まで長さのある髪が、伊関が頭を振るたびに揺れる。

流されていく視線と永見の視線が絡み合う。

その瞬間、永見の全身に鳥肌が立った。

心臓の鼓動が急速に高まり、息苦しくなってきた。喉が渴き、手が震え頬が紅潮する。

——見つけた！

舞台の上で縦横無尽に振る舞う伊関の姿に、永見は確信した。

それこそ伊関にだけスポットが当たったかのように、永見は彼の姿だけを追いかけてしまう。照明やメイクの関係で常人では認識できないだろう顔の造りも、ほんの小さな目の動きも、相手がすぐ近くにいるかのようにはっきりとわかる。

舞台の間中、まさに息継ぎする間も惜しんで食い入るように伊関だけを見つめていた永見は、アンコールが終わり場内が明るくなった瞬間、はっとする。

「永見、どうだった？」

溝口の顔を見上げた永見は、薄い唇をきゅっと噛み締める。

「楽屋口はどこにある」

僅かの躊躇いののちに問う。

「確か、一度会場を出て裏に回った.....」

「すみません、関係者以外の方は.....」

中に入ろうとすると、案の定、制止の声がかかる。永見はうるさそうに胸ポケットから名刺を取り出すと強引に手渡す。

「アポは今度取りつけるから、今は見逃してくれ」

「え.....？ ちょ、ちょっと待ってください.....」

慌てて永見を追いかけてようとする男の手を、後ろから掴む者があった。振り返った男の目が、突然現れた、髭を蓄えた大男の出現で恐怖に震える。

「別に怪しいモンじゃねーんだ。ほら、俺の名刺もやるからさ、よく見えてくれ」

溝口から渡された名刺に目を向ける。

『株式会社電報堂 情報宣伝営業部カメラマン 溝口義道』

恐怖の表情が驚きに変わる。

「電報堂さんみたいな広告代理店がうちみたいな弱小劇団になんの用が……？」

「すぐにわかるよ」

溝口は笑顔で答える。

永見が何をするとつもりか、溝口は予想ができていた。

永見は終演後の興奮冷めやらぬ舞台裏を大股で歩く。主役とはいえ小さな劇団のこと、控え室は男性用、女性用の二つだけだった。

永見はそれらしい部屋を見つけると扉をノックする。

「開いてるよ」

永見はひとつ深呼吸をする。指先の震えに気づいた永見は、自分が緊張していることを知る。そんな自分に苦笑してから扉を開ける。

「失礼します。伊関拓朗くんはいますか？」

賑やかだった控え室の中が、見知らぬ来訪者の出現にしんと静まる。

そして皆の目が、この場には不似合いなほど上等のスーツに身を包んだ男に向けられる。

「私は電報堂の永見と申しますが、伊関くんは……」

「なんの用？」

部屋の奥でゆらりと人の影が動いた。黒のハイネックに黒のスリムのジーンズを穿いた男は、ドーランを落としている最中だったのか、長い前髪をピンで頭に上げていた。

鋭い視線を目にした瞬間、永見の全身が栗立つ。舞台上で目にしたのと同じ強い光を感じる。

漲る生命力や強い生気は、近くにいるとよりはっきり感じられる。

触れたら火傷しそうなほど、野生の匂いがする。

「できれば二人でお話したいのですが」

永見の言葉で、周囲がざわついた。しかし男は気にすることなく、ピンを外してから永見の横を擦り抜ける。かなり永見よりも背が高く、がっしりとした身体つきをしている。

伊関は控え室よりさらに奥に位置する非常口の階段脇に立つと、胸の前で腕を組む。

「それで、用って何？」

「うちと契約しませんか？」

ぶっきらぼうに聞いてくる伊関に永見は名刺を差し出し、単刀直入に切りだした。

「契約？」

伊関は眉を上げる。

「先ほども申し上げましたが、私は広告代理店の電報堂に勤めています。現在、新しい商品のイメージキャラクターを探しています」

「それが俺っていうわけ？」

伊関は永見の言葉を途中で切った。

「俺のこと何も知らないくせに、よくも……」

「出身は静岡。君は確か、大学にストレートで合格したあと、二年で退学。今の劇団に入団して二年。七月生まれの二二歳でしたよね。違いますか？」

ぐっと伊関は黙り込む。

大学入学を機に東京に出るまでの十八年を、伊関は実家のある静岡で過ごした。

両親と二歳年上の兄・拓磨、そして伊関の四人家族で、父はサラリーマン、母は主婦というごく普通の家庭に育った。

典型的な優等生タイプの兄とは、常に比較され続けた。兄のことが嫌いではなかったし、兄も伊関を愛してくれていた。

でもだからこそ、兄のようにはなれない自分に、伊関は常に苛立ちを覚え兄にも反発した。

演劇に興味を持った最初のきっかけは、高校生のときだ。学園祭で劇を行うことになり、成り行きで伊関も舞台に立つことになった。

中学生の時点で一八〇センチを超える長身の伊関の容姿は人目を集め、舞台は大成功を収めた。

このとき、スポットライトを浴び喝采を向けられる快感を知った。

そして家から逃れるように東京の私立大学に入学してすぐ、学内の演劇サークルに入った。

学内では大分大きめで、かつ本格的に活動しているところだったが、入部三か月でやめた。

それからはアルバイトに明け暮れながら、時間ができると様々な劇団の公演に足を運んだ。そして二年になる直前に自分でそれなりに納得のできる演出をする劇団に出会えた。それが安念昌知率いる、『新宿五番街』である。だが、団員の募集はしていなかったため、毎日練習所に通いつめた結果、安念その人に本気なのだと思われ入団したのである。

そして夏を前に、役者の道に進む覚悟で大学を退めたのだ。

黙って決めたことで父に勘当を言い渡されたものの、兄だけは違っていた。コンプレックスの元である兄との和解により、両親ともいつかわかり合えるだろうと、このときには思っていた。

「私は伊達や酔狂で仕事をしているわけではありません。ましてや冗談などでこんな話はできません」
永見はそこで一度言葉を切り、伊関を見つめる。

「ずっと君を探していました。今進めている仕事の私のイメージキャラクターに相応しい人間は、君以外あり得ません」

「なんだよ、それ」

永見の言葉の勢いに押され、伊関は態度を僅かに軟化させ、とぎれとぎれに言葉を紡ぐ。

「探してたって……だったら、なんでもっと早くに声をかけてこないんだ」

「探してはいました。でも今の今まで君だと気づかなかったのですから仕方ありません」

伊関はそのとき初めて、目の前にいる男の顔を認識したような気がしていた。

控え室に訪れたのを見たときからやけに整った顔をしていると思っていた。フレームレスの眼鏡の奥の瞳は鋭く、スーツに包まれた身体はかなり細身で、四肢が長い。

指が綺麗だと思った。首が細くて華奢だと思った瞬間、伊関の身体の一部が突然、熱くなった。

やばい——吐嗟に思った。

伊関は女より男により反応するタイプだ。その事実を本当の意味で認識したのは、大学に入ってからだった。相手はアルバイト先で知り合った、気の合う仲間の一人だった。

気づいたときひどく動揺し、苦しみ悩んだ結果、自分自身を受け入れることにした。

とはいえまだ一度も男と試したことはなく、女性とセックスできないわけでもない。だが無意識に身体が反応してしまうのは常に男だった。

そして今自分は、目の前に突然現れた永見潔という男相手に、全身で反応している。

目線、喋り方、気配、雰囲気ของすべてが自分を誘っている。

「君しかいません」

傍から聞けばまるで熱烈な愛の告白にも取れるその言葉に、思わず自分の境遇を鑑みて伊関は唾を飲んだ。

安念に認められ『新宿五番街』に入ったものの、その安念自身が『大東京』という劇団に引き抜かれてしまった。それにより後ろ盾や目指す物を失いかけていたところで、大きなチャンスが巡ってきた。

新しく『新宿五番街』に迎えられた演出家は、安念に比べると比較的メジャー志向で、一般の人にもわかりやすい演目を選んでいて。

今回の定期公演は注目を浴びていて初日からかなり客足が良く、雑誌の取材も多かった。このプレッシャーに負けた主役が五日目に倒れた。この機会を伊関は逃さなかった。

『俺、台詞、全部入ってます』

伊関はいちかばちかで試してみた。

演出家も舞台監督も、一斉に伊関の顔を見た。なんとしても公演中止だけは避けたかったのか、とりあえずということで申し出が受け入れられた。

だが伊関自身は、『今日だけ』で終わらせるつもりはなかった。何がなんでもこの役を自分のものにしてみせると決意していた。

役については、本気で普段からこういう日が訪れる場合もあるだろうと、十分研究を重ねて、自分なりに理解していた。

そして、幕が降りたとき、主役は完全に伊関のものになっていた。観客だけでなく、演出家などの劇団関係者からも温かな拍手が伊関に送られた。

アンコールに応え、舞台上に再び伊関が現れると、会場中の割れんばかりの拍手が伊関を包み込んだ。

深々と頭を下げながら、胸に沸き起こる感情を存分に味わっていた。実に高校二年の文化祭以来、約四年ぶりの充実感だった。

『伊関拓朗』の名が、口コミで演劇ファンに広がり、日増しに観客が増えていった。ミニコミ誌が伊関にインタビューを申し込んできた。ある日、ヒットメーカーと言われる劇団『A』の演出家からの花が贈られてきて、皆をあっと言わせた。

ここまでで、すでにできすぎの話だ。

さらに、広告代理店のトップである電報堂の人間に、こんな風に言われるわけがない。

あまりに突然の話に、正直揶揄われてるとしか思えない。そう否定しながら、永見と名乗った男のあまりにも真剣な表情に、伊関の胸に悪戯心が沸き上がる。何も知らない癖に、と。

「いいよ」

伊関はジーンズのポケットに手を突っ込み、足を一步前に踏み出す。

「本当ですか？」

永見の目元が緩むのを見て、さらに身体がずきんと脈打つ。

「ただ……条件がある」

さらに足を踏み出し永見の前で足を止め、ポケットから出した右手を細い顎に伸ばす。みじろぎひとつしないその顔を引き寄せ、伊関は唇を軽く重ねる。永見は目を閉じることなく、じっと伊関を見つめていた。

「俺、こっちの趣味なんだ」
怯みそうになる自分の心を奮い立たせるように、伊関はわざと嫌な言い方をする。
「それが何か？」
しかし『こっち』が何を意味するのかわかったように、永見は応じる。
「この業界にいれば、珍しいことではありませんし、人の趣味嗜好をとやかく言うつもりはありません」
「そういうことを言ってんじゃねーんだよ」
予想に反した永見の冷静すぎる対応が、かえって伊関の神経を逆撫でした。
伊関は永見の腕を掴み、細いその身体を壁に押しつける。階段の裏で、通路からの死角に入ったのを確認する。
「条件っていうのはさ」
永見自身を服の上から前ぶれもなく握りしめると、端正な顔が歪む。
「こういうことなんだ」
さらに永見の白い首筋に歯を立てた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>